

が行われるべきこと、(4)聖公会の教会では聖餐テーブルと会衆との間に大きい間隔が設けられているが、この聖餐テーブルは会衆が最も近づきやすい場所、会衆の真中におかれるべきこと(87頁)などを示唆している。

以上がこの書の概略である。今、気付いた点を次ぎに掲げてみると、

(1)聖礼典 (sacraments) の数の問題、或は transubstantiation, consubstantiation などの問題に著者は全くふれていない。著者は聖書的、福音的立場を追究しているのであるが、宗教改革者達の聖餐に対する態度に殆んど言及していない事を残念に思う。特に1662年制定のクランマの祈祷書中、聖餐に関する立場に大きい影響を与えたものはカルヴァンであるが、彼について少しも言及されていないのは意外である。

(2)トレント会議の決定事項の中で、特に聖餐の問題を著者はとりあげ、それを出発点として犠牲についての論議を展開している。トレント会議で確認せられたのは transubstantiation であった。聖餐をもって犠牲とするとの決定がトレント会議における聖餐の中心的関心事でなかったのではないだろうか。勿論、著者は聖公会教職の中に、聖餐を神に対する (Godward) 犠牲と考える人々がいるという事実を重視し、実際の立場からこの様な論議に出発したことを我々は認めるものである。

(3)現在のローマ・カトリック教会及び正教会においては聖餐がどのように理解されているか、についても全く言及されていないのは残念である。共同陪餐 (intercommunion) の問題に対し、より深い洞察を得るためには、そのような面に対する追究が当然なされるべきであろう。

(4)最後に具体的な例として、日本基督教団の式文中、聖餐式に関する部分を眺めてみると、スティブスが指摘している形に非常に近い事を発見する。合同教会としての教団が採用した聖餐式の執行形体は、世界教会運動の中で一つの指標となるのではないだろうか。

(辻中昭一)

H. A. Reinhold, *The Dynamics of Liturgy*, New York, The Macmillan Company, 1961, 146 pp.

現代のキリスト教界における最も著しい現象の一つは、礼拝に対する関心が、かつてないほど高まってきたことである。前世紀の中ごろから最近にかけて、礼拝に関する歴史的、原理的、実践的研究が盛んに行われ、近年においては、礼拝を充実させようとする動きが現実の教会生活を復興する力となり、いわゆるリタージュカル・ムーヴメント (Liturgical movement) として発展している。

本書の著者、H. A. Reinhold は、ローマ教会においてこれまで長きに亘りリタージュの改革運動につくした代表的人物として知られている。彼はドイツに生れ、司祭に任ぜられ、後にナチスによって故国を追われてアメリカに渡った。また1951年には、リタージュ改革運動への努力と指導力に対する名誉として St. John's University から神学博士の学位を授けられている。これまでに、彼は、リタージュに関連して *Bring the Mass to the People* (1960) という著作といくつかのパンフレットを刊行し、*Commonweal*, *Jubilee*,

Architectural Forum, Worships などの雑誌に多数の論文を載せている。本書「リタジーの動態」(The Dynamics of Liturgy)は、過去20年間に色々な機会に書かれた多くのエッセイで構成されている。以下にその内容を略記する。

1. 「リタージュカル・ムーヴメントの発端」(The Beginnings of the Liturgical Movement)

彼は本章で、リタージュカル・ムーヴメントの起りを回顧しその様子を実に生々と論述している。1913年に起った1つの出来事、すなわち、若き修道士と若い信者及聖職志願の人たちとの出会いによる、現実のリタージュに対する批判と新しい内容づけが、後のローマ教念の革新に偉大な貢献をなしたことを述べる。第1次世界大戦はこの新しいムーヴメントを中断したが、戦後すぐ多くの刊行物が出され若い聖職者たちに拡まり、リタージュの歴史的探求も共同でなされてきた。アメリカにおいても Michael Ducey 司祭の献身的な努力が重ねられ、リタージュの革新のための基礎を固めたという。その詳細に亘る紹介ができないが、彼らの革新せんとする事柄には次の諸点があった。①日常的信仰と祭壇の上での公の礼拝との間にあるギャップ。②日曜日のミサは、すべて、死せる形骸・古代及中世の遺物ではないか？ 聖職にあるものも、何故にかくの如き化石化した附随的な儀式を守るのかを十分に理解もせずに行っている。我々は古物愛好家や美術愛好家ではないのだ。といった痛烈な自己批判を伴いながら、リタージュの回復のために労苦した様子がうかがえる。そして今やドイツ及アメリカにおいて、聖職にある者も信者も共にカトリック生活の最もバイタルな本質的な事柄の中に参与していることを報告している。「宗教生活における信仰者の心は、教会と同じリズムで動きはじめ、教会は信仰者の魂の中にめざめた。」(6頁)。

2. 「民の働き」(The Work of the People)

この章では、教会自体の宗教的意識と実践及び信仰と神学とが、悲しいことに時代追従的となり、守勢をとっていることを確認し、又、信仰者の生活も伝統と習慣によって固定化し、まことのこころを喪失して宗教的に骨のないものとなっていることを指摘する。そしてこの状況を今一度回復せんとする重要な課題を担うものがリタージュカル・ムーヴメントであり、その最もよい矯正手段の一つであるという。そのために、リタージュにおける自国語の部分的使用の許可や、Eucharist の再発見のための努力を例示する。また、教会は化石でなく生きた有機体であり、骨ではなく骨をもった体 (Body) であり、個人主義的でなく共同体的・教会的であって、「もはやバラバラの個人ではなく体の細胞なるメンバーである」ことを強調する。

3. 「レント：再生と復活」(Lent: Rebirth and Resurrection)

本章は、レントの精神と革新されたレントのリタージュについて論究する。レントはすべて聖週 (Holy Week) への準備であって、日毎のミサと祈りは復活祭へと向う。そしてこの期間中も、決断の時であり、習慣という固い土の表面を耕す時であり、旧約において予示され新約で現実となった出来事に従って精神と心を形成する時である。従って、レントを主の苦難と復活にあづかる洗礼と聖餐の準備の期間として徹底的に考慮すべきである

と主張する。従来の習慣的なレントは他のリタージュと同様に信者があまりに不活発であるが、ラテン語や儀式主義の中に閉じこめられた豊かな財宝は、真の現実性(reality)によって革新され開放され広められねばならない。そのために我々はなす限りの努力をすべきであると著者は力説している。

4. 「クリスマス周期」(The Christmas Cycle)

第4章は、ローマ教会の教会暦の実際を理解する上に大いに参考になる。クリスマス暦の冬の周期は非常に複雑で因習化しているが、主の誕生の我々に与える意味を受け入れる時、新たな内容をその中に発見することができるという。そして、ローマ教会のリタージュは決して芝居がかった大げさなものでなく控目で尊厳ある精神で導かれていることを自認する。しかし、クリスマスの宝を与えておりながら、今なお教会外の世俗化したクリスマスによって害されているのは、信者や聖職にあるものみんなの責任であるという。「世俗主義を生じさせる浅薄な感情主義に対立する最も力強い薬は、恩寵のつばさに乗って来るみことば(Word)である」(71頁)。そしてそれは「キリストの到来のゆたかさ」(78頁)によるのである。

5. 「リタージュと芸術」(Liturgy and the Arts)

5章は、教会建築と教会音楽に関連した論述である。今日新しい信仰的確信から、教会建築においても彫刻や音楽その他の芸術においても、新しい信仰の表象が大胆に湧出されていることを例示する。(例えば、洗礼所や悔悛室の位置及びその神学的意味付け、又その建築様式の現代的在り方等々について詳述している。) それに反して、自己の宗教を新しい時代に直面させない場合、それは「逃避宗教」であって十字架の精神のうちにはないと論難する。また、今日リタージュにおいて、個々の礼拝者と祭壇の上のキリストとの間の、又、礼拝者相互の人格的接触が不可能とされていることを指摘し、教会が「宗教的なスーパーマーケットと霊的給油所」となり、そこで祭司は御用達となり信者はお得意先となるのだと皮肉るのである。そして信徒は無学な無感情な受身的な「たいくつした観客者」の立場に甘んじていてよいのか?と訴えている。

6. 「聖餐とリタージュ」(The Eucharist and Liturgy)

本章は、まずローマ教会の聖餐の秘跡に関して論じ、次いで「家庭の聖餐」(Family Communion)に関して述べる。特に後者に関しては、現代の家庭の共同体的性格を強調し、「家庭は祈りの共同体(a community of prayer)」(108頁)であり、「どの家庭も極少短縮型の教会(a miniature church)」(108頁)であり、Family Communionほど重要なものはないという。

7. 「2, 3の革新」(A few Reforms)

本章では、はじめにリタージュにおける自国語の使用について述べる。かつては、ローマ教会の一致の絆としてラテン語の象徴的価値が強調されてきたが、このことは安易に鵜呑みにすべき事柄ではない。教皇庁は公式にリタージュにおける自国語の部分的使用が有益であることを明示したが、著者としては、英語圏においては全面的に英語を用いたとも言っている。次に、聖書日課書(Breviary)の革新に関する諸注意を提示し、特に、今

迄の聖書日課書を自国語に、しかも現代の口語体に翻訳すべきであるという提案をなしている。

8. 「リタジーと献身」(Liturgy and Devotion)

終章は、まず「現代の献身」(Devotio Moderna)として知られた宗教的リバイバル、就中 Thomas Hemerken (彼は Kempen の出身の故に à Kempis とよばれた)の働きにつき詳述する。ここでの「キリストの模倣」の解説は卓越したものである(130-133頁)。終りに、リタジーを精神生活に関係づけ、「靈的發展：神の本性の累進的共有」なる小標題の下に、深く感動的に記している。そこで、リタジカルな態度とは、キリストが見つけた聞いた同じ態度を取ろうとすることであり、キリストのからだなる教会に合体せんとすることであると説明する。

以上の如く、我々は著者 Reinhold の博学で機知に富んだ、挑戦的な論述の中に、現代におけるリタジーの革新への若々しい熱情を感得する。このリタジー革新への首尾一貫した視点に立った本書は、カトリック、プロテスタントのいずれを問わず、習慣とマンネリズムの中に真の宗教的生命を埋没してしまっているすべての層の人々をめざめさせ、リタジーに対する受身的な態度を一新させ、歴史的遺産を公正に評価、理解せしめる誠実なエッセイ集である。

ローマ教会において、リタジーは驚くほど煩瑣化し固定化し、迷信的または異教的要素が潜入していると思われるが、その革新のために、信者や若い聖職者たちの、下からの勇壮かつ自発的な貢献がなされつつあり積極的な運動が展開されつつあることを本書を通して教えられ、多大の喜びと励ましとを与えられるものである。

プロテスタント教会の立場をとる我々にとっても、教会の革新への志しは彼等と共通するところであって、このリタジカル・ムーヴメントへの寄与も、共同の資産となるのである。

我々も、リタジーを再発見するための共同の課題への捨石になるべく、努力を続けなければならぬ。
(鳥飼慶陽)

Ernst Benz, Hans Thurn u. Constantin Floros,

Das Buch der heiligen Gesänge der Ostkirche, Furche Verlag,
Hamburg, 1962, 210 pp.

ギリシャ正教並びにロシア正教は①、ローマ・カトリック教会及びプロテスタント教会側から、異質的なものとみなされているが、独自の存在意味をもつ教会、特に初代キリスト教会教理を、最も純粹に伝承してきたことを誇としている教会である。然し東方教会研究は、何しろ分野が広いので、一冊で全体を把握しようというのは困難である②。東方教会は背後に長い独自の歴史と、その中で培って来た文化的諸形態をもっているから、独立の研究領域として、欧洲の有能な学者達の興味と努力が集中されている。特に、ローマ・カトリック教会が世界教会運動に積極的に乗り出している現在では、東方教会の正しい理